

世のため人のために尽くした 山之内 仰西

久万高原町



仰西渠の明渠

江戸時代、馬具などの販売を手掛ける商人であった仰西は、若いときから大宝寺（久万高原町）に出入りし、僧侶の法話に接しては自らの信仰を深めていた。また、土木工事を好み、自ら土木工事に対する見積り設計を立てるなど、ことのほか世のため人のためになることを行った。当時、久万村（現久万高原町）は、水利の便がきわめて悪く、西明神村の久万川に堰をして水を貯め、何十もの笕（水を引くとい）をつないで田に水を引いていた。しかし、



仰西渠の暗渠

洪水のたびに笕が押し流され、修築には多くの経費と日数を費やすばかりか、ひとたび流失すると田は干上がって米が収穫できず、農民は困窮を極めていた。こういった農民の窮状をみかねた仰西は、妻や一族に援助を求め、問題の解決に乗り出した。そして、自ら地形等の調査を行い、藩主の許可を受けて難工事に取り掛かった。仰西は、毎日工事場に出て玄翁を振りながら、多くの石工や人夫の指揮監督もした。当時は、玄翁と石のみでこつこつと安山岩の断崖を切り開いていくしか方法がなく、炎天の日も極寒の日も工事は続けられ、1日1時間も休まない日が3年も続いた。この間、石工らの賃金や資材などの経費は全て仰西の私財でまかなわれた。また、農民が掘った岩石くず一升の賃金として米一升を与えたため、山之内一族までも破産に近い状態になったと言われている。

このような物心両面の犠牲をはらいながら、幅約2.2メートル・深さ約1.5メートル・長さ約57メートルの灌漑水路「仰西渠」は完成し、地域の水田25.8ヘクタールを潤した。仰西渠は現在も農業用水として活用されており、昭和25（1950）年には県史跡に指定された。

仰西は、仰西渠の開削に続いて、松山方面から来る行商人や旅人のために旧坂本村（現松山市久谷町）から三坂峠に続く難所「鍋割坂」を改修したり、露の峰から旧小田町（現内子町小田）を隔てていた絶壁の急坂「切石道」を開削した。また、民衆を教え導くため、その教化道場である法然寺精舎を建立するなど、人々の願いと郷土の発展のために私財と全生涯を捧げ、元禄11（1698）年に天寿をまっとうした。

その功績は現在も語り継がれており、仰西翁奉賛会では、毎年法要や墓掃除などを実施したり、書道コンクールを開催したりしている。

〔参考資料〕

仰西翁三百年忌記念事業推進委員会 『仰西』
久万町誌編集委員会 『久万町誌増補改訂版』
久万町教育委員会 『文化財物語』